

# 『心の中の風景』

野崎 信春

道は、サイン・カーブを描いて果てしなく続いていく。遙か数km先に、松林が見え、このすさまじいUP-DOWNもそこで終わり、こいさしい。まわりは一面の原野。ところどころに家があるだけ。高曇りの空が、心まで荒涼とさせた。一つの坂の頂上に立つ。かたがたの自動車が来た。しばらくして、ようやく僕を追いこしていき、た自動車は、ひとつ先にある坂に吞まれてしまふ。てい分近くも車の音すらも聞かぬ。これも北海道だと僕はそのとき思ふた。

〈49年夏合宿 北海道美幌にて〉

前日の夕方から降り続いた雨もど、と昼過ぎにあがった。外はまだ深い霧で10m先も見えない。それでもかまわず僕は自転車で踏み出した。深い霧の中、高原の石がゴロゴロした道をゆくり走り、2kmのこの高原では霧が下か上か見上げれば唯一の雲をみつけた。うなづいてバカな事を考えながら進むうちにフッと建物が霧の中から現れたかと思ふと又、霧の中に沈んでいく。しかし高原の霧は明るい。崖の上に立つと、この下はどうなっているのか皆目、見当がつかない。この先には空しか残りような感じだ。夕方になると急に霧が晴れた。晩秋の高原が360度の展望が……橋や穂高も見えた。遠く見えたのは立山連峰だろうか。そのず、と先は、日本海なのだろうか。それとも雲海が続いているのだろうか。夕食も終えて外に出て見ると、11時の間にか、夜のとばりが降りていた。夢絶たばかりの

星空である。た。都会育ちの僕には、滅多にお目にかかれないう天然のプラネタリウムである。この日本のどこにも6等星まじりハッキリと見える場所があるだろうか。

〈50年秋 ソロ・ツーリング 美ヶ原にて〉

藤倉さんの子回ものパンクで、予定は遅れに遅れた。盛岡で打上げと肉に合うためには、今日中に宮古について、おしたの轡に輪行しなげればなるまい。しかし宮古まで数十kmを残し、夕闇が僕と友人を包んでいく。主要道かよはずれたこの三陸の夜の国産には、街灯は一本もない。小せな町並を行き過れば、僕らの先を照らす灯、フェリー・ライトの丸い輪の外は、真の闇が来た。夏合宿とは言え、前日まじ僕らは自由気ままに走っていた。4人一緒に走、た覚えはない。しかし今はばかりは、みんなピッタリと寄り添い、そそくさとパダルをこぐ。暗闇では感覚が狂、そそくさの坂では、登、こいたのか下、こいたのか分かんなくす。こしまう。時々、僕達を追い抜いていくトラック野郎の満纏飾の灯りが妙に懐しい。峠のドライブインに着いたときは、もう10時を過ぎていたのだ。半分居眠りをしてながい食べたラーメンのことも今でも不思議と思いがす。

〈50年夏 東北合宿 宮古にて〉

僕は今、実験室の暗闇の中でニキシー管のデジタル表示の推移を見つめながら卒論の最後の追い込み中だが、水も吸、左真線のようによよと疲れた頭の中に時々フッと広がる風景がある。実験室の重苦しい雰囲気の中で、そそくさはまじりハッキリとパダルをこいでいた自分だ。た

り、あるいは峠の頂上か丁の素晴らしい展望に感激している自分の姿  
だ、たりする。そんな時だ。僕の自転車の虫が突然に目覚めて暴れ回  
るのは。もう一度あんな風景を眺めてみたいという気持ち僕を自転車  
に駆り立てる原動力にな、ているのだらう。峠を登、こいたり、かつ  
がましているときなどは、金輪際自転車をんかつものかと思、た事  
も一度なはず。しかしハッと気付いて振り返、て見れば、自転車がも  
う一台増えているし、春にを、た丁どこへ行こうかなどと考えている  
自分を見つけたりする。なんでこんな物好きなのか不思議な気がして  
いる今日この頃です。